氏　　名	川澄哲也（かわすみてつや）

（論文内容の要旨）

本論文は、論者が過去6年間に6度にわたって行った現地調査をもとに、中華人民共和国青海省の省都、西寧市で話されている漢語方言（以下「西寧方言」）の音声および文法特徴について記述し、あわせてその形成史を論じたものである。この地域は、漢族の他にモンゴル系、チベット系、チュルク系に属する様々な民族が雑居する多言語・多民族地域である。この点を考慮して、本論文では随所において言語接触の観点を取り入れた考察が行われている。各章ごとの内容と論点は以下のとおりである。

第1章では西寧方言、および論文中で言及されるアルタイ諸語やチベット語等の各種言語や、それを用いる民族に関する簡単な解説を行う。

第2章では西寧方言の音声特徴が記述されるとともに、分節音については、伝統的な中国語方言研究の枠組みに従う先行研究では明示されてこなかった音素体系について考察している。

2．1節では、西寧方言の音節構造として「頭子音(Initial)＋わたり音(Glide)＋音節主音（Nucleus）／声調（Tone)」という枠組みが提示される。音節主音の後に韻尾(Final)を想定する必要がないという点が、他の漢語方言に比して特徴的であると指摘している。

2．2節から2．4節では、頭子音、わたり音、音節主音の各々の位置に現れる音声について音素分析が行われ、母音音素8、子音音素25の計33の音素を抽出している。また、口蓋化及び円唇化した異音の出現を説明するための音韻規則も設定される。2．4節ではまた、特に西寧地方で行われている民謡“花児”を取り上げ、そこに見られる押韻事例を参考にし、本論文が示した、音節主音の位置に現れる音声の音素分析の妥当性が検討されている。非常に聞こえの異なる音声同士であるにも関わらず西寧方言話者が“押韻している”と判断した花児を取り上げ、それらの音声を同一音素に所属する異音と分析した本論文の解釈と矛盾しないことを述べてい

る。

2. 5節では、西寧方言音と北京方言音の対応関係が示される。また、西寧方言には北京方言に現れない音声が多数あるものの、それらはいずれも西寧方言の内部変化の結果であると解釈できることが指摘され、一部先行研究が主張する西寧方言の分節音レベルへの他言語の影響は、これを認める必要のないことを指摘している。

2. 6節は声調について記述する。先行研究では単音節語で4声調を認めているが、西寧方言話者の感覚や音響分析の結果に基づき、単音節レベルでは44（高平）調と24（低昇）調の2声調の対立のみであることが示される。その一方で、2音節語における連読変調（tone sandhi）の観察結果に基づき、単音節レベルでは2声調のみの対立であっても、それぞれは更に、変調の仕方が異なる二つのグループに分けられることが指摘され、現状では西寧方言は4声調体系を有しているとの結論を提示している。また、漢語で声調の合流（単純化）が起こる場合、一般的には先ず単音節レベルにおいて合流が始まるという傾向をもとに、西寧方言では現在、声調数が減少に向かっていると推測している。そしてその要因として、声調を有さない周辺諸言語との接触が考えられると指摘している。この西寧方言の音声面における言語接触の影響は、先行研究では指摘されてこなかったものである。

第3章では西寧方言の文法が扱われる。特に、漢語方言としては珍しい特徴で、漢語の内部変化の結果とは想定しづらいものを取り上げ、周辺で話されている各種言語との接触の影響を考慮しながら議論が行われる。

3. 1節では、西寧方言の語順について考察が行われる。西寧方言では、他の漢語方言と同じSVO語順が用いられるほかに、近隣少数民族言語の基本語順と同じSOV語順を用いることも多い。本論文ではその影響元の言語について議論が行われる。先行研究ではこの語順の使用がアルタイ諸語、チベット語いずれの影響を受けた結果であるかに関して見解が分かれてきた。本論文ではアルタイ諸語とチベット語とで差が出る「名詞と修飾語の語順」に着目し、西寧方言と同じく漢語と少数民族語との接触の影響が指摘されている各種の言語でこの語順がどう現れるかを調べている。チベット語の影響が強いと言われる接触言語に関しては、「名詞＋修飾語」と

いう、漢語固有のものとは逆でチベット語と同じ語順になっていることが示される。一方、西寧方言はアルタイ諸語と同じ（漢語固有の）「修飾語＋名詞」という語順を用いている点を指摘し、西寧方言に見られるSOV語順の使用にはチベット語の影響はないことが論証されている。

3．2節では格(case)を標示する様々な後置要素について論じている。それらの中にはモンゴル系言語、特に土族語や保安語で使われる要素と音形、機能が共通／類似するもののあることが指摘され、これら2言語が西寧方言に強い影響を与えた可能性が高いという考えが示される。一方、能格言語の性質をもつチベット語では標示されない直接目的語が、西寧方言では後置要素“xa”によって標示されるなど、格標示に関しても西寧方言とチベット語との間には違いがあることに触れ、3．1節で提示した、語順面でチベット語からの影響はないという考えを補強している。

3．3節では前置詞的要素“把 pa”の用法を、標準漢語における“把”の用法と対照させて論じている。SVO語順を基本とする標準漢語において“把”は目的語を動詞に前置するために用いられる(S-把O-V)。但し標準漢語では、目的語が不定（indefinite）の事物であったり、動詞が感情、状態などを表すものの場合は、“把”を伴う構文が使えない。これに対し、西寧方言で“把”を用いる場合この制限が存在しないことが、回収された文例によって明示的に示されている。

3．4節では、“安心”“結婚”のような、前部要素が動詞、後部要素がその目的語という構造の語（VO型離合詞）の多くが、西寧方言の文中では順序を前後逆にできるという現象を報告している。標準漢語でも、条件が整えば順序を入れ替えられるものがあるが、西寧方言では非常に多くのVO型離合詞が自由に順序を入れ替えることができることが観察され、これは西寧方言がSOV語順を多用することに起因する現象であると結論付けている。

3．5節においては、西寧方言において特殊な機能を示す形態素tso(便宜的に漢字「着」で表記する）について分析を加えている。これは（a）時間関係、理由、逆接を表す副詞的従属節の末尾位置、および（b）動詞と移動動詞から成る動詞連続の間という2種類の環境に現れている。このような要素は標準漢語には存在しな

い。

（a）の位置に用いられる”着”に関しては、モンゴル系言語を母語とする者が漢語を学習した際、漢語が元来有する、2動作が同時進行の場合に先行する動詞に“着”を付加するという語法がモンゴル系言語の副動詞（converb）語尾の用法と類似することに基づき、“着”を副動詞語尾の如く従属節末に頻繁に用いるようになったという考えを示している。（b）の環境に現れる“着”については、漢語でかつて広く用いられていた“動詞＋‘将’＋移動動詞”という構文に由来するという考えが述べられている。先行研究では上記（a）／（b）の環境に現れる“着”を一括りに扱い、ともに接触により新たに発生した要素と考ていた。

3．6節ではまとめとして、第3章で取り上げた各種の文法特徴の発生に対して包括的な説明が可能になるのは、モンゴル系言語、とりわけ土族語と保安語からの影響を想定した場合のみであると結論付けている。ちなみに2つの言語は、話者の移住により19世紀に分かれたもので、基本的に同じ言語である。

第4章では、西寧方言がどのような過程を経て形成された言語であるのかについて、言語学的な議論に加えて西寧一帯の歴史、とりわけそこに居住する民族の変化に関する研究成果を参考にして考察している。4．1節で先行研究の各種見解を紹介した後、4．2節で本論文における考えを述べる。

まず4．2．1節では、言語接触が言語に変化をもたらす際の2種類の型、すなわち「借用（borrowing）」と「言語の取り替えに伴う基層の干渉（interference through shift）」のそれぞれの特徴の紹介がある。借用による言語変化は、まず語彙借用が発生し、接触が強まるにつれ構造面にも影響が及び得るのに対し、言語の取り替えに伴う干渉では、語彙には影響が少ない反面、構造レベルに変容をもたらすという、言語接触についての従来の研究から得られた一般化が示されている。そしてこの変化の方向性の違いに基づき、言語接触に起因する言語変化が起きた場合、他言語からの語彙面、構造面の影響がそれぞれどの程度見られるかを確認すれば、上記2つの型のどちらが関与した結果であるのかを見分けることができるという考えが示される。4．2．2、4．2．3節ではこの基準を西寧方言のケースに当てはめ、西寧方言

は周辺言語からの借用語が少ない一方で、構造面に大きな変容を来している事実を確認し、この点から西寧方言の変化には「言語の取り替えに伴う干渉」が関与したという考えを示している。第3章での議論に基けば、言語の取り替えをしたのは、土族語、保安語話者の集団であったと考えられる。土族語や保安語を母語としていた集団が、漢族の影響を受けて漢語へと言語を取り替えたが、その際母語の特徴(の一部)を彼らが習得した漢語に持ち込んだため、当地の漢語が変容を来した。これが、本論文が行った言語学的考察から描き出すことのできる西寧方言形成過程であると述べる。

4．2．4節では上述の推測が、西寧およびその周辺地域の歴史、特に明代末期から清代後期にかけての各民族の人口統計の変遷の様子から裏付けられることを示している。当地の歴史に関する研究と清初に書かれた史料を参考にして、明代末期、西寧に20万人以上住んでいたと記録される土族、保安族（史料では「土人」と記録される）が、清代後期に至るまでの間に4万人程度にまで減少したというデータを示している。一方で、清代に西寧の漢族は人口を急増させたことを指摘し、このような人口変化の一因として、いくつかの歴史研究が指摘する、土族、保安族から漢族への民族転化があったという見解に同意している。また18世紀中葉の西寧の様子を記述した史料に当時の土族が土族語を失い始めている様子が記録されている事実にも触れている。これらの点に基づき本論文では、18世紀中葉以降、土族語話者、保安語話者が本来の母語から漢語へ言語を取り替え、その過程で当地の漢語が変容を来したという考えが述べられている。また西寧では、変容を来した漢語が漢族によっても用いられているという点から、土族や保安族が言語を取り替える過程で生み出した変容を来した漢語がそのまま西寧方言となっているわけではないことを補足している。土族等が変化させた漢語と漢族の話す(本来の)漢語とが再度接触を起こし、両者の諸特徴が“取捨選択”された結果成立した漢語が現在の西寧方言であると見なければならないというのが、本論文の示す、西寧方言形成史についての最終的な見解である。

氏　　名	川澄哲也（かわすみてつや）

（論文審査の結果の要旨）

本論文は、中華人民共和国青海省の省都、西寧市で話されている漢語方言（以下「西寧方言」）の音声および文法特徴について記述し、あわせてその形成史を論じたものである。もとより中国語の方言は中国語学の分野で研究される。しかし、青海省をはじめとする中国語圏と他言語圏との境界地域においては、言語接触の結果特異な特徴をもつ中国語の方言が話されており、それらは言語接触に関する研究の対象として、言語学の分野でも研究されてきている。しかるに、従来基礎資料として利用されてきたのは現地の研究者による簡略な報告書であり、言語接触の影響を論じる場合にも単なる印象論に終始する傾向があった。西寧方言の場合は、周辺にチベット系およびモンゴル系、チュルク系の言語が話されていて、それらの言語の影響が西寧方言には見られると漠然と述べられるだけであった。それ故、中国語に堪能な言語学者による詳細な調査の必要性が認識されてきた。論者はこのような状況に鑑み、過去6年間に6度にわたって現地調査を行い、その成果として本論文を完成させた。

論文は、5章から成り立っている。第1章では、西寧方言が話される地域で使われる種々の言語とそれを話す民族についての概要が説明される。第2章では音声と音韻の分析が行われ、第3章では、SOVの語順や格語尾に類した要素など西寧方言に特異な文法現象を記述した上で、それらが具体的にどの言語からの影響で成立したものかが論じられる。このような特異な特徴をもつ西寧方言が何時頃、どのようなプロセスで成立したのかを、言語接触に関する言語学的な研究と、当該地域の歴史とを勘案しながら論じたのが第4章である。第5章は全体のまとめである。

論文全体は論者の収集した資料によりつつ、現地の研究者の成果も必要に応じて批判的に活用する形になっており、記述の信頼性は高い。また言語接触を主要な観点としてこの方言を記述した研究は従来存在していないので、研究テーマの点からも高く評価される。とりわけ次にあげる点は特筆される。第1に、収集したデータ

に徹底した音素分析を施し、従来の研究で列挙されてきた分節音を音素と異音に峻別した。そして弁別素性を用いた記述により、異音の出現を説明する音韻規則を設定することに成功した。また、音節構造が頭子音＋わたり音＋音節主音に分析され、音節末子音を想定する必要がないという点で他の漢語方言に比して特異であることも指摘される。一方で抽出された西寧方言の音素と標準漢語の分節音を比較するすると、差違は認められるもののすべて西寧方言内部の変化として説明でき、言語接触の影響は認められないという注目すべき結論が得られた。

第2に、従来の研究では単独音節に4声調あるとされてきたが、論者は音響分析も活用しながら実際は2声調の区別しかないことを明らかにした。しかしながら、複合語に見られる連続声調の振る舞いを観察すると、基底形としては4声調の区別を認めるべきであることも指摘する。そして4声調が単音節レベルで2声調に合流している背景には、声調のない言語との言語接触が原因として考えられると指摘している。

第3に、SOVの語順成立の背景として、修飾語＋名詞という語順や過去時制に能格現象を反映した語順が見られないという事実からチベット語からの影響が排除される。さらに西寧方言では格語尾に類した形態素が使われており、その形式と機能を詳細に分析し周辺言語と比較したうえで、影響を与えた言語はモンゴル系の土族語に他ならないことを明らかにすることができた。

第4に、西寧方言には土族語を初めとする言語からの借用語は少ないが、構造面での変容を受けていることに着目する。そして言語接触による言語変化一般についての研究成果を援用し、この変化は借用によるのではなく、土族語の話者が母語を漢語に取り替えるさいに、彼らの話す漢語に土族語からの干渉が働いたとことによると推定している。この推定は、西寧地域の歴史を調べることによって確認される。すなわち明代末期には20万人ほど居住していたとされる土族が、清朝末期には4万人程度にまで落ち込んでいる一方、土族が自分の言語を忘れ漢語化しているという同時代の記録がある。西寧方言の成立の時期や背景については諸説あったが、論者の言語学的な観察に基づく推定と当地の歴史から知られる事実が合致し、土族語

から漢語への取り替えが清朝期に進行していたことが見事に解明された。

言語接触についての研究では、接触言語の詳細な記述と接触によって成立した現象かそうでないのかの考究、成立の背景に関する地道な歴史研究がなされないままに、ともすれば根拠のない仮説や印象論が展開される傾向があり、論者の本研究はそのような皮相的な研究に警鐘を鳴らすとともに、将来の研究のひな形とも成るべきものである。その点からも本論文は高く評価されるだろう。とはいえ、全く問題点がないわけではない。複合語に見られる連続声調の記述では、複合語の意味を反映したストレスアクセントの影響がないかどうかや、語声調として解釈できるかどうかの検証が行われていない。また西寧方言内部に標準漢語に近い変種とそうでない変種が混在し、使用域を異にする可能性も十分に調査されていない。しかしこれは、今後も研究を続けていく過程で明らかにされるべき将来の課題でもあり、論者の今後の研鑽に期待したい。

以上審査したところにより、本論文は博士（文学）の学位論文として価値あるものと認められる。なお、2009年2月20日、審査委員3名が論文内容とそれに関連した事柄について口頭試問を行った結果、合格と認めた。